

1 押し入れ

元々、民家だったこのギャラリーの壁の向こうには押し入れがあると知って、ふと、5〜6歳の頃にいつものように何らかの悪さをして母親によく押し入れに入れられたことを思い出した。

入れられた直後は、ワーワーギャーギャー泣き騒いでいるが、騒ぐのも疲れるとただボーとしていた。

もちろん閉じ込められているから真っ暗で何も見えない。

でもある程度の時間が経つと目が慣れてきて、周りが見えてくる。

狭いが何となく落ち着く。

やることもないので、眠たくなってきて、押し入れの布団の間で寝始める。

起きると、襖があげられるようになっていて

何事もなかったように出ていった。

2 生きていく気

吉野さんにこんなことを聞かれた。

「アーティストとして生きていく気ある？」

正確には覚えていないがそんな質問だったと思う。

2・5秒後ぐらいに私は、「作品を作り続けていこうという気はあります。」と答えた。

私は、投げかけられた疑問文に対して

「はい」と「いいえ」で答えるのがいつも苦手だ。

私は、アーティストというよりも、作品を作る人でありたい。

「同じだろ。」と言われるかもしれないが、

私にとっては少し違う。

アーティストであるかどうかは、他者が決めるものであり、
作品を作るかは自分で決めることだ。

だから、自分がアーティストである証明をダラダラと並べる時間があるなら

私は、自分の作品を並べていたい。

まあ、そんなことはどうでもいい。

どちらかというと「生きていく気がある？」という言葉に引っかかって
返答するまでに2・1秒ぐらいかかった。

思い返すと私は、生きていこうと思って今まで生きていない。

どちらかというと生きてしまっているという言葉が正しい。

言い換えると死にたくないのだ。

これはほとんどの生きとし生けるものに打ち込まれた
プログラムであるから多分、仕方がない。

でも今、あの質問についてよく考えてみると

「生きていく気はないが、死んでいく気はある。」と

答えられるようになってしまっている感じがする。

3 相殺的思考

自分の思想とか考えの中心の近いところに
プラスマイナスゼロみたいなものがある。

「相殺的思考」だ。

ディズニールランドは無条件で楽しいところであるという勝手な認識で
その入園の前後に楽しくないことがあるような感覚があつて
小学生以来遊びに行っていないこと。

何か、凄く嬉しい出来事があつても

その後、地獄のような出来事がくるのではないかとか、その逆も然り。

あと、残業が多かった月の給料が振り込まれた時に

虫垂炎になって入院するなどの経験からも

そういうことも相殺的思想を自ずと強固にしてしまうこともある。

だから、心の奥の方で日頃の色々な出来事に

敏感になってしまっているのかもしれない。

そんな、因果応報的な恐怖におびえる私は、

「墓穴を掘る」という諺の由来にもそのような考えがあることを知った。

それは、平安時代の陰陽師が他者を呪い殺すときに、

自分も呪い殺される覚悟を持つという意味で

「人を呪わば穴二つ」という言葉が生まれ

そこから「墓穴を掘る」という諺になった。という話だ。

「人を呪わば穴二つ」という言い回しは、教訓である。

そして、呪いを実行する者の覚悟を問うような伝え方である。

ある意味、宣言でもあるが、贖罪的にもみえる。

「墓穴を掘る」というのは、「人を」という他者を表現する単語が
無くなってしまったがために、墓穴Ⅱ自分の墓穴ということになり
イメージした時にどこか哀愁が漂う。

風景が見える言葉になっている気がする。

さらに、「く穴二つ。」という部分がなくなっているので、相手の墓穴か自分の墓穴かも分からない点が、プラスとマイナスの行動を同時に行っているようにも解釈できるような余地がある。

というより、私は元の意味を失いかけている。

以上の三つの項目から

覚えていない罪と緩やかな罰で、罰の受け方を覚えた。

アーティストとして生きることよりも人間として生き続けることの困難さから生きることで死ぬことへの諦めと覚悟を見つけた。

思い込みから自滅していく人間の罪の感じ方は、罪の背負い方を教えてくれた。

つまり、私は墓穴を掘っているということに気付いた。